



## 01 学校トイレの最新現場事例2015

新潟県糸魚川市立

# 糸魚川小学校



糸魚川駅にあった赤レンガ車庫を思わせる学校正面。雁木造りも導入。



中庭には芝生が植えられ、舞台にもなる外階段を設置。



中庭に面した広い多目的ホールは子どもたちのいこいの場。

子どもの居場所としての  
快適性にこだわり抜いたトイレ  
ワークショップで  
新校舎の考え方を共有

「久しぶりに糸魚川小学校に行ったら、低学年トイレに『トイレで遊ばないこと』と書いてありました。逆に我々の意図通りに使われているなど思いました」と笑うのは、同校のトイレ設計等を手がけた設計事務所ゴンドラの小林純子代表です。同校は誰にとっても居心地のいい学校を目指し、子どもたちが思い思いに過ごせる場づくりの工夫が凝らされています。同校の開校は明治5年。長い歴史の中で、校舎は幾度かの改修がなされ、現在の新校舎がで

きる前は、築50年ほどの建物が建っていました。同校の靄本修一校長は、当時を振り返り、「すっかり老朽化し、特にトイレはひどい状況でした。窓が少ししかなく真っ暗。臭いがかもって、便器はすべて和式でした。『子どもが怖がり、学校のトイレに入れない。何とかしてほしい』と教育委員会に直訴する保護者の方の姿もありました」と言います。

今回の新校舎の構想は平成21年に開始。プロポーザルコンペが実施され、長澤悟東洋大学名誉教授監修のもと、創建築設計事務所、設計事務所ゴンドラ、近藤道男設計室のチームが選ばれました。その後、地域を含め



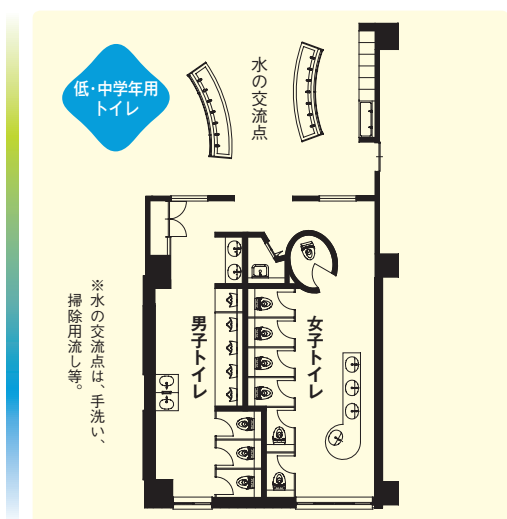
成長に合わせて高さを変えた小便器は、清掃性を配慮した壁掛け式。恥ずかしがる子には緩やかな仕切り板も。正面開口部以外に洗面台の足もとにも窓を設置。



トイレから出たところにある洗面台。大きな鏡を設置し、空間を広く見せている。裏側には雑巾掛けのバーが設置されている。



トイレの外の洗面台は、手を洗うほか、歯を磨いたりするのに使う。廊下との仕切りはあえて設けずに床材を変えている。



### 教室間にあり、どこからも行きやすい

どこの教室からも行きやすいよう建物の中央部にトイレを設置。光を取り込むために外光が取れる場所を選んだ。





た「みんなの夢を育む学校」を実現するために、市職員、学校職員、地域住民、PTA、設計チームが参加するワークショップを4回開催。新しい学校の基本的な考え方を決めていきました。

工事は、費用を抑えるために仮設校舎を作らず、4期に分けて、空いている教室を利用して、少しずつ解体しては建てる方法が取られました。5年に及ぶ工事の間、週一回は必ず、学校側と工事関係者間で情報交換を行い、子どもたちの安全を確保するとともに、授業に支障がないようにしました。

## トイレのおこもり部屋で 元気を取り戻して

こうしてできあがった新しい



大便器も掃除がしやすいように壁掛け式を採用。新校舎ではすべて洋式便器となっている。

学び舎は、青々とした芝生の中庭を囲むように渡り廊下や校舎が配置されています。中庭から廊下やオープンスペースに陽が射し込み、校舎全体が明るく心地よい空間となっています。

「成長段階の小学生には、学年ごと、クラスごとに集まれる場所はもちろん、数名で遊べる場所、本を読むための場所など、いろんな居場所が必要。その考えのもと、あちこちに子どもたちが快適に過ごせる仕掛けを作っています」(小林さん)

トイレにもこの考え方が取り入れられています。例えば、低・中学年用トイレには、通称「おこもり部屋」という円柱型ブースを設置。地元産の杉で囲まれ、癒しの空間といった雰囲気です。

「何かあったらここに数分こ



一人でゆっくりとこもりたい児童に配慮して、木材で覆われたリラックスできるブース。

もって、落ち着きや元気を取り戻してほしいと考えて作りました」(小林さん)

また、トイレが楽しい場でもあるように、空間にカラフルな色を使い、高学年用トイレでは空間のデザインそのものも変えています。特に男子トイレの小便器には、便器のスペースごとに専用窓を設け、低・中学年にとつて「高学年になれば、あそこが使える」といった憧れの場になるような作りを施しました。

「人の居場所の中でも、水まわりは交流の場の一つ。水のある場所には自然と人は集まります。井戸端も給湯室もそうですし、トイレもしっかりです」

排せつの場に加え、交流の場の役割も果たすトイレに求められるのは快適性。小林さんは、

壁には県産の杉を使って。乾式と湿式の両方の床掃除ができるように床はタイルを採用。

水栓金具は教育的な配慮からレバー式に。

